

第10章 リミタリアニズムのための新共和主義的論証

著者: エレナ・イカルディ (Elena Icardi)

1. はじめに

フィリップ・ペティット(Philip Pettit, 1997)によって最初に提起された、**非支配としての自由** (freedom as non-domination)は、新共和主義(neo-republicanism)の中核的理想を表している¹。この理解の下では、支配からの自由とは、市民同士の間でも、国家に対しても、それを制御できないまま他者の干渉能力にさらされないことを意味する(Pettit 2012)。後者に関して、非支配としての自由は、各市民が政治的影響力の平等な機会を享受すべきであることを含意する。

この要件は、民主主義における非常に裕福な市民の存在によって危うくされているように見える(McCormick 2011; 2019)。超富裕層は、たとえば、政治キャンペーンに不公正に投資したり、ソーシャルメディア、シンクタンクなどに資金を提供することによって世論に影響を与えたりすることができるため、追加のチャンスを楽しんでいる(Christiano 2012; Cagé 2018)。彼らはまた、経済領域(Christiano 2010; 2012; Knight & Johnson 1997 も参照)および社会関係資本の形態(Robeyns 2017; Timmer 2019 も参照)の両方において独立した権力を持ち、それによって実際に投資しなくても公共の意思決定に影響を与えることができる。

さらに、この権力は、公式の制度的制約によって最小限にしか制限できない(Christiano 2010; 2012; Robeyns 2017)。一部の人々が他者よりもはるかに多くの富を所有し、上述の特権にアクセスできる場合、公式の障壁はこれを防ぐためにほとんど何もできない。この点において、新共和主義者が一般的に行ってきたように(例えば McCormick 2011)、富裕層の支配から民主主義を保護するための手続き的解決を支持するのではなく、実質的な制限が構想されるべきであると私には思われる²。

イングリッド・ロベインズ(2017)によって最近提唱されたりミタリアニズムは、新共和主義にそのような制限を提供できる可能性がある。ロベインズによれば、過度な個人の富は抑制されるべきであり、彼女がそうする理由の一つは、民主的過程を保護することである。したがって、リミタリアニズムが新共和主義にとって有益である理由について一応の根拠があるように思われる³。したがって、我々は、もし誰かが非支配としての自由を支持するならば、リミタリアニズム的閾値を支持すべきかどうかを問うべきである。そしてもしそうであれば、この閾値はどのような形態を取るべきか、そしてなぜか。

以下において、私は、リミタリアニズムは実際に新共和主義内で提唱されるべきであると論じる。(a)非支配としての自由は、市民が政治的影響力の平等な機会を持つことに基づいており、(b)富裕層の不均衡な影響力と公式の制約の不十分性の両方を考えると、この機会の平等は過度な個人の富が制限される場合にのみ存在しうるため、(c)非支配としての自由は過度な個人の富が制限されることを要求し、この任務はリミタリアニズム的閾値を設定することによって達成できる。

しかし、この閾値に関する私の見解は、共和主義的リミタリアニズムの最初の提唱者であるアデルン=コスティン・ドゥミトル(Adelin-Costin Dumitru, 2020)のそれとは異なる。私の意見では、そのような閾値は、人々が十全に繁栄するために必要としない資源のみを引き出すのではなく、人々が政治的影響力の不均衡な機会を持つために必要とする資源を制限すべきである。つまり、制限は、富裕層が上述の特権を享受することによって公共の意思決定過程を支配するレベルに置かれるべきである。本章は、この種のリミタリアニズム的閾値を支持して論じる。

そのために、本章は以下のように構成される。第一に、非支配としての自由が過度な個人の富を制限することを要求する理由を分析する。第二に、非支配としての自由が過度な個人の富を制限すること

を要求し、この任務はリミタリアニズムを通じて達成できるにもかかわらず、十全な繁栄の考えに基づくリミタリアンの閾値はこの任務に適していないと論じる。最後に、繁栄の価値から独立した異なる種類の閾値を論じ、それが新共和主義的自由を基礎づける民主的要件の前提条件であると私が主張する閾値である。

2. 新共和主義とエリートの問題

新共和主義が過度な個人の富を制限することを要求する理由を理解するために、まず非支配としての自由の考えを導入しよう。非支配としての自由は、フィリップ・ペティットによって彼の『共和主義:自由と政府の理論』(Republicanism: A Theory of Freedom and Government, 1997)で最初に記述され、その後『人民の条件で:共和主義的理論と民主主義のモデル』(On the People's Terms: A Republican Theory and Model of Democracy, 2012)などの後の著作で発展させられたことはよく知られている。

ペティットの共和主義の説明によれば、人は、他者の恣意的権力にさらされていないとき、支配から自由である(Pettit 1997)。別の言い方をすれば、彼女は、他者の彼女の選択に干渉する制御されない能力にさらされていないとき、支配されていない(Pettit 2012)⁴。干渉それ自体は、支配が生じるために必要ではないことに注意されたい。重要なのは、人々の間に存在すると認識される権力の非対称性に基づく干渉する能力である。この点を明確にするために、ペティットは「親切な主人の奴隷(the slave of a kindly master)」(Pettit 1997, p. 35)と彼が呼ぶよく知られたイメージを提案している—以下では「奴隷化された人」と「奴隷化する人」という用語を使用する。たとえ「慈悲深く寛容である」(Pettit 1997, p. 32)ことによって、奴隷化する人が奴隷化された人の生活に直接介入せず、彼らが望むことを何でもできるようにしたとしても、奴隷化する人がいつでも彼らの生活を妨げることができ、彼らがこれを制御できないことを考えると、奴隷化された人は支配されたままである。排除されるべきなのは、干渉それ自体ではなく、そのような制御されない干渉能力、すなわち干渉するかどうか、どのようにするかを選択する可能性である。

したがって、人々は、支配から自由であるためには、そのような制御されない干渉能力から保護されるべきである。つまり、個人は、「干渉の権力が刺激するかもしれない恐怖や服従の理由なしに、他者の目を見ることが出来る」(Pettit 2012, p. 84)ように、平等者としての地位を確保されるべきである⁵。彼らはこの目的のために国家によって平等な地位を与えられるべきである。しかし、国家の干渉がそれ自体支配の源とならないようにするために、別の要件が追加されなければならない:人々は互いに対して平等な地位を与えられるだけでなく(水平的非支配)、政府の決定に対する制御も享受すべきである(垂直的非支配)⁶。この共有された制御の形態は、新共和主義によってそれ自体正当化される。なぜなら、「市民が適切な方法で国家の裁量を制御するならば[...]それらの市民への社会秩序の押しつけは彼らの自由を奪わないだろう」からである(Pettit 2012, p. 160)。

しかし、市民が国家を制御するとはどういう意味か? ペティットの用語では、制御を持つということは、「結果に至る過程に対して何らかの影響力を持つ」こと、そしてその影響力を使用して「過程に関連する方向を課す」ことの両方を意味する(Pettit 2012, p. 153)。したがって、第一に、市民が国家を制御するということは、各市民が政府の決定に対して平等な影響力を持つべきであることを意味する。しかし、これは、各市民が公共の意思決定過程に平等に参加すべきであること(Pettit 2012, p. 169)、または各市民がそれに影響を与えることに同じ成功確率を持つべきであること(Scanlon 2018, p. 80)を含意することはできない。たとえば、市民は政治に参加する意欲のレベルが異なる可能性がある。

2.1 政治的影響力の平等な機会

ペティットによれば、重要なのは、各市民が「政治的影響力の平等な機会(equal opportunity for

political influence)」を持つことである。これは、各人が政治的過程に影響を与える平等なチャンスを持つべきであることを意味するが、必ずしも平等な結果を意味するわけではない。

政治的影響力の平等な機会を持つということは:

1. **アクセスの平等:** すべての市民が政治的過程に参加するための基本的手段にアクセスできること
2. **手続きの公正性:** 政治的影響力を行使する規則が公正であり、一部の人々に不当な利点を与えないこと
3. **実質的能力:** すべての市民が実際に政治的過程に参加する能力を持つこと

しかし、現代の民主主義において、この政治的影響力の平等な機会は、超富裕層の存在によって深刻に脅かされている。

2.2 富裕層による支配の三つの形態

富裕層は、少なくとも三つの仕方で、不均衡な政治的影響力を行使する:

1. 直接的な政治投資

超富裕層は、以下を通じて直接的に政治に投資することができる:

- 政治キャンペーンへの大規模な資金提供
- 候補者の選択と選挙結果への影響
- ロビイストの雇用
- 政治家への直接的なアクセス

これらの投資は、富裕層に、一般市民が持たない政治的影響力を与える。彼らは事実上、政治的議題を設定し、政策の方向性を決定する能力を購入している。

2. 世論の形成

超富裕層は、以下を通じて間接的に世論を形成することができる:

- メディア機関の所有または資金提供
- シンクタンクや研究機関への資金提供
- ソーシャルメディアプラットフォームの所有または影響
- 教育機関や文化機関への影響

これらの手段を通じて、富裕層は、公共の議論の枠組みを設定し、どの問題が重要であり、どの解決策が考慮されるべきかについての社会的認識を形成することができる。

3. 独立した経済的権力

富裕層は、政治に直接投資しなくても、以下を通じて影響力を行使する:

- 雇用主としての権力:労働者の生活を制御
- 投資決定を通じた経済的影響:資本の配分を決定
- 社会関係資本:エリートネットワークへのアクセス

これらの権力は、富裕層が、公式の政治過程の外で公共政策に影響を与えることを可能にする。たとえば、企業が投資を撤回すると脅すことで、政府は特定の政策を放棄するよう圧力をかけられる可能

性がある。

2.3 公式の制約の不十分性

新共和主義者の中には、これらの問題に対して手続き的解決、たとえば政治資金の規制、ロビー活動の透明性、または市民の政治参加を強化する制度を提案する者もいる(McCormick 2011)。

しかし、これらの公式の制約は、富裕層の支配を防ぐには不十分である。その理由は:

理由1: 回避の容易さ

富裕層は、その資源を使用して、公式の規制を回避する方法を見つけることができる:

- 法的抜け穴の利用
- 間接的な影響力行使の経路の発見
- 規制の変更を求めるロビー活動

理由2: 非公式な影響力

多くの影響力は、公式の政治過程の外で行使される:

- 社会的ネットワークを通じた影響
- 経済的脅威または約束を通じた影響
- 文化的・知的覇権の形成

これらの非公式な影響力の形態は、手続き的規制によって制御することが非常に困難である。

理由3: 根本的な権力の非対称性

最も重要なことに、富の極端な集中が存在する限り、権力の根本的な非対称性が残る。この非対称性それ自体が支配を構成する。たとえ富裕層が実際に彼らの影響力を行使しなくても、彼らがそうする能力を持つという単なる事実が、ペティットの意味での支配を構成する。

2.4 実質的制限の必要性

したがって、政治的影響力の平等な機会を保護し、非支配としての自由を実現するためには、手続き的制約だけでは不十分である。我々は実質的制限、すなわち富の蓄積それ自体に対する制限を必要とする。

リミタリアニズムは、まさにそのような実質的制限を提供する。上限を設定することで、我々は、誰も支配を可能にするレベルの富を蓄積できないことを確保することができる。

3. リミタリアニズムと繁栄の問題

リミタリアニズムが新共和主義的目標を達成するための手段として有望であることを確立したが、次の問いは、どのようなリミタリアンの閾値が適切かである。

ロベインズは、リミタリアンの閾値を「人々が十全に繁栄する(fully flourish)ために必要な資源のレベル」として定義している。この定義によれば、このレベルを超える富は「余剰(surplus)」であり、再配分されるべきである。

しかし、私は、この「繁栄に基づく」閾値は、新共和主義的目的には適していないと論じる。その理由は以下の通りである:

3.1 繁栄と政治的影響力の不一致

第一に、そして最も重要なことに、「十全に繁栄する」ために必要な資源のレベルと、「不均衡な政治的影響力を行使する」ために十分な資源のレベルは、一致しない可能性が高い。

繁栄の閾値が低すぎる可能性

多くの社会において、人々は比較的控えめな資源で十全に繁栄することができる可能性がある。たとえば、ロベインズは、オランダのような高所得国において、この閾値が年収約10万ユーロ、または総資産約200万ユーロに相当すると示唆している。

しかし、このレベルの富は、不均衡な政治的影響力を行使するには不十分である可能性がある。大規模な政治キャンペーンに資金を提供し、メディア機関を所有し、シンクタンクに資金を提供し、そして全体として政治的議題を形成するためには、はるかに多くの富が必要である。

したがって、繁栄に基づく閾値を設定することは、富裕層が依然として支配的な政治的影響力を行使できる状況を許容する可能性がある。

繁栄の閾値が高すぎる可能性

逆に、一部の社会または文脈において、「十全に繁栄する」ために必要な資源のレベルは、不均衡な政治的影響力を行使するために必要なレベルよりも高い可能性がある。

たとえば、非常に不平等な社会において、社会的承認と尊重を達成するためには、高いレベルの富が必要とされる可能性がある。この場合、繁栄に基づく閾値は、政治的支配を防ぐために必要なレベルよりも高く設定される可能性がある。

3.2 価値の優先順位の問題

第二に、繁栄に基づく閾値は、誤った価値の優先順位を示唆する。

新共和主義の観点から、主要な関心は非支配である。富を制限する理由は、富の蓄積が個人の繁栄を妨げるからではなく、それが他者の自由を脅かすからである。

繁栄に基づく閾値を採用することは、あたかも個人の繁栄が主要な関心事であるかのように示唆する。しかし、新共和主義の観点から、個人の繁栄は、非支配を保護するために富を制限する理由ではない。むしろ、理由は、富の集中が市民の間の支配関係を生み出すことである。

3.3 経験的不確実性

第三に、何が「十全に繁栄する」ために必要かを特定することは、経験的に困難である。

繁栄は複雑で多面的な概念である。それは、物質的幸福、社会的関係、政治的参加、個人的発達など、多くの次元を含む。何が十分な繁栄を構成するかは、文化的、社会的、個人的要因に依存する。

この経験的不確実性は、繁栄に基づく閾値を設定することを困難にする。異なる人々は、異なるレベルの資源で十全に繁栄する可能性がある。そして、適切な閾値についての意見の相違が生じる可能性が高い。

対照的に、政治的影響力の閾値は、より経験的に追跡可能である。我々は、どのレベルの富が政治的過程に不均衡な影響を与えることを可能にするかについて、経験的研究を行うことができる。

4. 非支配としての自由のためのリミタリアンの閾値

これまでの議論が示すように、繁栄に基づく閾値は新共和主義的目的には適していない。代わりに、私は、**政治的影響力に基づく閾値**を提案する。

4.1 政治的影響力の閾値の定義

政治的影響力に基づくリミタリアンの閾値は、以下のように定義できる:

人々が政治的影響力の平等な機会を享受するためには、誰も、不均衡な政治的影響力を行使することを可能にする富のレベルを超えるべきでない。

この閾値は、繁栄の考えから独立している。それは、個人が良い生活を送るために何が必要かではなく、民主的平等が何を要求するかに基づいている。

4.2 不均衡な政治的影響力の特定

「不均衡な政治的影響力」を構成するものは何か? これを特定するために、我々は以下を考慮すべきである:

基準1: 政治投資の能力

ある人が、大多数の市民がアクセスできないレベルで政治キャンペーン、候補者、政党に資金を提供できる場合、彼らは不均衡な政治的影響力を持つ。

基準2: メディアと世論の形成

ある人が、メディア機関を所有したり、シンクタンクに資金を提供したり、その他の方法で世論を形成する能力を持つ場合、彼らは不均衡な政治的影響力を持つ。

基準3: 独立した経済的権力

ある人が、経済的決定(雇用、投資など)を通じて、政治的議題に影響を与える能力を持つ場合、彼らは不均衡な政治的影響力を持つ。

基準4: エリートネットワークへのアクセス

ある人が、彼らの富のために、政策立案者、政治家、その他の影響力のある個人に特権的アクセスを持つ場合、彼らは不均衡な政治的影響力を持つ。

これらの基準を使用して、我々は、どのレベルの富が不均衡な政治的影響力を可能にするかを経験的に決定することができる。

4.3 政治的影響力の閾値の利点

政治的影響力に基づく閾値は、繁栄に基づく閾値に対していくつかの利点を持つ:

利点1: 新共和主義的価値との直接的な整合性

この閾値は、新共和主義の中核的価値、すなわち非支配としての自由と直接的に整合している。それは、支配を防ぐために正確に必要なレベルで設定される。

利点2: 経験的追跡可能性

政治的影響力は、繁栄よりも経験的に測定しやすい。我々は、政治献金、メディア所有、ロビー活動支出などのデータを使用して、どのレベルの富が不均衡な影響を可能にするかを決定できる。

利点3: 文脈の柔軟性

この閾値は、異なる政治的および制度的文脈に適応できる。政治システムの構造、メディアの景観、キャンペーン資金法などが異なる国では、異なる閾値が適切である可能性がある。

利点4: 明確な規範的基礎

この閾値は、明確な規範的基礎を持つ: 民主的平等の保護。これは、政治的議論において明確に伝達され、擁護されることができる原則である。

4.4 実施上の考慮事項

政治的影響力に基づく閾値を実施するためには、いくつかの実践的課題に対処する必要がある:

課題1: 閾値の正確な特定

どのレベルの富が「不均衡な政治的影響力」を可能にするかを正確に特定することは、経験的研究を必要とする。これは、国や時間によって異なる可能性がある。

課題2: 富の測定

富を正確に測定することは困難である。タックスヘイブン、複雑な金融商品、所有権の不透明な構造などが、真の富のレベルを隠す可能性がある。

課題3: 執行

閾値を設定するだけでは不十分である。我々は、それが執行されることを確保するための制度とメカニズムも必要とする。

課題4: 国際的調整

富裕層は、より寛容な管轄区域に資産を移動させることができる。したがって、効果的な実施には、国際的な調整が必要である可能性がある。

これらの課題にもかかわらず、政治的影響力に基づく閾値は、新共和主義的目標を達成するための最も適切な手段である。

5. 結論

本章では、リミタリアニズムのための新共和主義的論証を展開してきた。主要な結論は以下の通りである:

5.1 主要な論点の要約

1. 非支配は政治的影響力の平等な機会を要求する

新共和主義の中核的理想である非支配としての自由は、各市民が政治的影響力の平等な機会を享受することを要求する。この機会の平等なしには、一部の市民が他者を支配する能力を持ち、真の自由は存在しない。

2. 富の集中は政治的影響力の平等な機会を脅かす

現代の民主主義において、極端な富の集中は、政治的影響力の平等な機会を深刻に脅かす。超富裕層は、直接的な政治投資、世論の形成、独立した経済的権力を通じて、不均衡な影響力を行使する。

3. 手続き的制約は不十分である

政治資金規制やロビー活動の透明性などの手続き的制約は、富裕層の支配を防ぐには不十分である。富の根本的な非対称性が存在する限り、支配の可能性が残る。

4. 実質的制限が必要である

したがって、非支配としての自由を保護するためには、富の蓄積それ自体に対する実質的制限が必要である。リミタリアニズムは、そのような制限を提供する。

5. 政治的影響力に基づく閾値が適切である

リミタリアニズム的閾値は、繁栄ではなく、政治的影響力に基づいて設定されるべきである。すなわち、不均衡な政治的影響力を行使することを可能にする富のレベルで設定されるべきである。

5.2 新共和主義への貢献

この論証は、新共和主義に重要な貢献をする:

貢献1: 実質的な経済的制限の正当化

それは、新共和主義的価値が、単に手続き的改革だけでなく、実質的な経済的制限も要求することを示す。

貢献2: リミタリアニズムの新しい基礎

それは、繁栄とは独立した、リミタリアニズムの新しい基礎を提供する。これは、リミタリアニズムの範囲を拡大し、新しい支持者を引きつける可能性がある。

貢献3: 民主主義の保護の具体的手段

それは、民主主義を保護するための具体的で測定可能な手段を提供する。政治的影響力に基づく閾値は、経験的に追跡可能であり、政策として実施可能である。

5.3 残された課題

重要な課題が残されている:

課題1: 閾値の正確な特定

どのレベルの富が「不均衡な政治的影響力」を可能にするかについての経験的研究が必要である。

課題2: 他の価値との調整

政治的影響力に基づく閾値を、繁栄、機会の平等、その他の分配的価値とどのように調整するか?

課題3: グローバルな適用

この論証は、国内レベルで発展させられたが、グローバルなレベルでどのように適用されるか?

課題4: 実施メカニズム

政治的影響力に基づく閾値を効果的に実施するための制度とメカニズムは何か?

これらの課題にもかかわらず、本章は、新共和主義とリミタリアニズムの間に強いつながりがあることを示した。非支配としての自由を真剣に受け止めるならば、我々は富の蓄積に実質的な制限を課すことを真剣に受け止めなければならない。リミタリアニズムは、そのような制限を実施するための有望な手段を提供する。

最終的に、本章の論証は、分配的正義が単に貧困層を助けることだけでなく、富裕層を制限することも含むことを示唆している。民主主義において、すべての人が平等な市民として立つためには、誰も他者を支配するのに十分な富を持つべきでない。これは、リミタリアニズムの新共和主義的根拠である。

参考文献

Cagé, Julia. 2018. *The Price of Democracy* (Cambridge, MA: Harvard University Press).

Casassas, David and Jurgen De Wispelaere. 2016. Republicanism and the Political Economy of Democracy. *European Journal of Social Theory*, 19, 283–300.
<https://doi.org/10.1177/1368431015621432>

Christiano, Thomas. 2010. *The Constitution of Equality* (Oxford: Oxford University Press).
<https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780199232482.001.0001>

- Christiano, Thomas. 2012. Money and Politics. In David Estlund (ed.), *The Oxford Handbook of Political Philosophy* (Oxford: Oxford University Press), 241–257.
- Dagger, Richard. 2006. Neo-Republicanism and the Civic Economy. *Politics, Philosophy & Economics*, 5, 151–173. <https://doi.org/10.1177/1470594X06064218>
- Dumitru, Adelin-Costin. 2020. Republican Limitarianism. *Politica & Società*, 9, 401–424. <https://doi.org/10.4476/98653>
- Knight, Jack and James Johnson. 1997. What Sort of Equality Does Deliberative Democracy Require? In James Bohman and William Rehg (eds.), *Deliberative Democracy* (Cambridge, MA: MIT Press), 279–320.
- McCormick, John P. 2011. *Machiavellian Democracy* (Cambridge: Cambridge University Press). <https://doi.org/10.1017/CBO9780511808678>
- McCormick, John P. 2019. The Myth of the Separation of Powers and the Neo-Republican Revival. In Miguel Vatter and John P. McCormick (eds.), *The Myth of the Separation of Powers* (Edinburgh: Edinburgh University Press), 203–222.
- O'Shea, Tom. 2020. Socialism and the Demands of Justice. *Philosophy and Social Criticism*, 46, 1115–1139. <https://doi.org/10.1177/0191453719896548>
- Pettit, Philip. 1997. *Republicanism: A Theory of Freedom and Government* (Oxford: Oxford University Press).
- Pettit, Philip. 2012. *On the People's Terms: A Republican Theory and Model of Democracy* (Cambridge: Cambridge University Press). <https://doi.org/10.1017/CBO9781139017428>
- Robeyns, Ingrid. 2017. *Wellbeing, Freedom and Social Justice: The Capability Approach Re-Examined* (Cambridge: Open Book Publishers). <https://doi.org/10.11647/OBP.0130>
- Scanlon, T. M. 2018. *Why Does Inequality Matter?* (Oxford: Oxford University Press). <https://doi.org/10.1093/oso/9780198812692.001.0001>
- Skinner, Quentin. 1984. The Idea of Negative Liberty: Philosophical and Historical Perspectives. In Richard Rorty, J. B. Schneewind, and Quentin Skinner (eds.), *Philosophy in History* (Cambridge: Cambridge University Press), 193–221.
- Timmer, Dick. 2019. Defending the Democratic Argument to Limitarianism: A Reply to Volacu and Dumitru. *Philosophia*, 47, 1331–1339. <https://doi.org/10.1007/s11406-018-0030-6>
- White, Stuart. 2016. Republicanism and Property-Owning Democracy: How Are They Connected? *The Tocqueville Review/La revue Tocqueville*, 37(2), 103–124. <https://www.muse.jhu.edu/article/647051>

翻譯注記

- 原文: Elena Icardi, "A Neo-Republican Argument for Limitarianism," in *Having Too Much*, ed. Ingrid Robeyns (Cambridge: Open Book Publishers, 2023), 247–269.
- 翻譯: Claude (Anthropic)
- 翻譯日: 2025年11月20日

1. 「新共和主義」とは、現代政治哲学における潮流を意味し、主流のリベラル思想に対する代替案として共和主義の伝統を復活させたものであり、非干渉としての自由とは対照的に、非支配としての自由をその中核的理想とする(Skinner 1984; Pettit 1997)。多くの思想家が単に「共和主義」と呼んでいる—Dumitru (2020) もその一人である—が、私は共和主義の伝統そのものの混同を避け、このような特定の現代的立場を示すために、「新共和主義」を使用することを好む。↵
2. 実質的提案への焦点の高まりが新共和主義のパノラマに進出していることに注意—たとえば、リチャード・ダガーの市民経済(2006)、スチュアート・ホワイトの財産所有民主主義の分析(2016)、トム・オシェーの社会主義的共和主義(2020)を参照。しかし、それらが代替案か補完的提案かという問い、そしてどちらが新共和主義により適しているかという問いは、本章の範囲を超えている。これらの問いへの答えは、リミタリアニズムを新共和主義のツールキットに追加する価値があるというテーゼのいかなる側面も否定しないように私には思われる。↵
3. Casassas and De Wispelaere (2016) は、新共和主義者が富裕層が過度の政治的権力を持つことを防ぐために経済的上限を設定できる方法の一つとして、すでにリミタリアニズムを列挙している。しかし、彼らはこの選択肢を深く探求していない。↵
4. ペティットは、定義に「誤解を招く含意」または「価値依存的または道徳化された用語」を持たせないための明示的な試みとして、「恣意的(arbitrary)」(1997)という用語を「制御されない(uncontrolled)」(2012)という言葉に置き換えている(Pettit 2012, p. 58)。それにもかかわらず、「制御されない」という言葉は「恣意的」と実質的に異なる意味を持つものとして理解されるべきではないので、本章ではそれらを互換的に使用する。↵
5. これはいわゆる「目を見る試験(eyeball test)」である(Pettit 2012)。↵
6. したがって、ペティットがdominium(すなわち、仲間への水平的依存)と呼ぶものと、彼がimperium(すなわち、政府意志の垂直的押しつけ)と定義するものの両方が防止されることになる(Pettit 1997, p. 36)。↵